

2024 年 12 月 23 日

## 留学報告書

南山大学長

ロバート・キサラ殿

外国語学部フランス学科

准教授・平田周

留学報告書をここに提出させていただきます。

研究課題：「プラネタリー・アーバニゼーション」の哲学的意味 – アンリ・ルフェーヴル  
からニール・ブレナー、そしてその先へ

受入機関：フランス国立社会科学高等研究院、再帰性についての学際的研究室

留学期間：2023 年 9 月 1 日～2024 年 8 月 31 日

本留学の目的は、都市化が地図上に行政的に確定された都市の領域を超えて、都市の「後背地」にあり、理論的には地球の生態系にまで影響を及ぼすプロセスであるという認識を深めることで、従来の都市研究を刷新しようとするニール・ブレナーが牽引する「プラネタリー・アーバニゼーション[惑星的都市化]」研究の哲学的意味を明らかにすることであった。特に、その理論的源泉であるアンリ・ルフェーヴルの都市社会学およびその現代的展開をリードするニール・ブレナーのテキストに着目した。

社会学的なテキストに哲学的意味を読解するアプローチを深めるために、本留学では、オーギュスト・コント、エミール・デュルケーム、マルセル・モースなどの古典的社会学や人類学のテキストならびにピエール・ブルデュー、リュック・ボルタンスキー、ブリュノ・ラトウールやなど現代社会学のテキストを読解し、そこに見られる哲学的モチーフを抽出することで、社会科学における哲学的次元を明らかにすると同時に、社会科学の成果を通じた哲学の新たな方向づけを示してきたブリュノ・カルサンティ教授を受け入れ教官にお願いした。留学において、彼のセミナーに参加し、カルサンティ教授および私と同様に研究休暇で彼を受け入れ教員として選んだ各世界国の教員や PD、そして大学院生と議論を交わし、有益な示唆を受けることができた。

そうした議論のなかで、本研究は、主に大戦間期におけるルフェーヴルの思想形成が、どのように第二次世界大戦後の「第二のオスマン化」と呼ばれるパリ改造を背景として着手された都市研究に結びつき、またそうした都市研究から現代の「プラネタリー・アーバニゼー

ション」研究に通じる理論形成過程において、彼の農村社会学の研究がいかなる役割を果たしているかを検討課題として焦点をあてることになった。

また留学期間中は、報告者が参加する共同研究——日本学術振興会「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業」学術知共創プログラム〔研究科題名：人間・社会・自然の来歴と未来「人新世」における人間性の根本を問う（Anthropocenic Actors and Agency in Humanity, Society, and Nature, 略称 AAA 研）〕（研究代表者：中村靖子教授）——の研究会にも ZOOM にて参加し、この研究テーマにかかわるフランス哲学・思想の新たな研究動向について報告を行なった。

上記の研究およびそれと並行して行われた研究のなかで公表された論文と翻訳、そして報告として以下が挙げられる。

### 論文

・「ある「世俗的心理学のカテゴリー」が辿り着いたひとつの場所 ——感情資本主義と共感の領域」、『現代思想』第 51 巻 15 号、「特集 感情史」、2023 年 12 月、121-135 頁。

### 翻訳

・ニール・ブレナー『新しい都市空間——都市理論とスケール問題』、林真人監訳、玉野和志、中澤秀雄、齊藤麻人、平田周、金澤良太訳、法政大学出版局、2024 年 5 月〔報告者翻訳担当箇所「第 9 章 惑星の都市化——都市問題の変容」〕。

### 報告

・「『惑星都市理論』について——プラネタリーアーバニゼーション研究に至る都市理論小史」、NIRA 総研研究会、2024 年 2 月 2 日。

・「『界』なきハビトゥス？——ブルデューとラトゥールをつなぐことを正当化するために」、AAA 研第 4 回全体集会報告、2024 年 3 月 31 日。

・「ANT は、どの点で都市研究に有用なのか——ニール・ブレナーによる『アッセンブリッジ・アーバニズム』評価を手がかりに」AAA 研第 4 回班別会議報告、2024 年 7 月 6 日。

・「習慣、居住可能性、非人間」、AAA 研第 5 回全体集会報告、2024 年 8 月 20 日。

また報告者は、フランスからの帰国後に本研究に深くかかわるニール・ブレナー氏の来日に合わせた研究会において以下にある二つの研究報告を行った。ひとつは、上記『新しい都市空間』をめぐる報告であり、もうひとつは、この邦訳の監訳を担当した林真人氏が出版した英語の著作（Mahito Hayashi, *Rescaling Urban Poverty—Homelessness, State Restructuring and City Politics in Japan*, Wiley, 2023.）をめぐるセッションにおいてのものである。このセッションでは、ブレナー教授のコメントに続き、報告を行なった。

- ・“Scale theory, study of planetary urbanization, and critique of everyday life”、日本教育会館 707 室、2024 年 9 月 15 日。

- ・“Commentary on Chapter 6 of *Rescaling Urban Poverty*”、日本教育会館 707 室、2024 年 9 月 15 日。

この留学以前において計画した研究は、進展し成果になったものもある一方、研究遂行時のテキスト読解作業や研究交流のなかで作業を見直したり、新たな課題を発見したりした部分も存在する。今後は、そうした修正や新しい課題に取り組み、その成果を著作や論文として公表できるよう、研究活動に励みたい。

最後に、このような留学の機会を与えて下さったことに心から感謝の意を記したい。また留学期間中にさまざまな学務を負担して下さいましたフランス学科をはじめとする先生方にも御礼申し上げたい。